

ノンフィクションを語る言葉

数々のノンフィクション作品を生み出した書き手たちが、ノンフィクションについて語った言葉を紹介します。

僕が考えているノンフィクションの定義はたったひとつで、自分が事実ではないと知っていることを事実として書かない。もしその一点が守られているなら、その文章はすべてノンフィクションです。—— 沢木耕太郎

『旅人の表現術』（角幡唯介／集英社）「対談 沢木耕太郎・角幡唯介」より

ノンフィクションを書く時の難しさの一つに、

風景（シーン）から何を読み取るかという問題がある。（中略）

シーンにどのような意味を見つけ、それを物語の中に組み込むかは、

すべて書き手の感性にかかっている。—— 角幡唯介

『アクルーカの行方』（角幡唯介／集英社文庫「あとがき」より）

ノンフィクションは天井のある四輪車ではない。

サイドカーに読者を乗せて山野を駆けめぐる大型のオートバイである。

天井がないから雨露はしのげないし、転倒する危険も常につきまとう。

そのかわり、サイドカーの乗員はまわりの風景にじかに接することができるし、

山河を渡る風を自分の頬に直接感じることができる。—— 佐野眞一

『私の体験的ノンフィクション術』（佐野眞一／集英社新書「プロローグ」より）

ノンフィクションという言葉の定義を狭く限定してもしかたない。（中略）

その作品がどれだけ読者の意表をついて、

思いがけない事実を提示することができるか、今までの価値観をひっくり返してくれるか、

その面白さがいちばん重要—— 最相葉月

『考える人 2008年夏号』（新潮社）「最相葉月インタビュー」より

取材しているといろんな枝葉におもしろいことがあったり、

またそういう枝葉にこそ、事実の多様性、あるいは社会の多様性、

人間の生きざまの多様性というのがあって、

そこどころがノンフィクションならではの魅力ではないかと私は思っているんです。—— 柳田邦男

『事実からの発想』（柳田邦男／講談社）「対談 柳田邦男・沢木耕太郎」より